

「貧困の実験」とクレイン「その二」

嶋

忠 正

七

この小論の（その一）において、クレインの自然主義の性格および文体的特質について縷々論述したが、ここでは締めくくりとして、この作品のテーマを中心に考究したいと思うのだが、もちろん、それには以上述べてきたようなクレインの文体的特徴と切り離しては考えられない、というより、彼の芸術的創作過程においては、むしろ印象主義的文体の発展ないし帰結として、テーマが意図されているというべきであろう。けれども一応、文体と切り離してテーマを考えるとすれば、その根底にあるものは、やはり執念にまでなつて、きびしく自己を律していたと思われる、作家の作品に対する実験的態度の必要性の発見、ないしは確認ということになるだろう。この意味において、すでに触れたごとく、作品の発表時期には関係なく、「貧困の実験」は、クレインの作家経歴の中で、その出発を印した記念すべき短編という榮譽をになつている。一見、単なる実験の記録といったルポルタージュ的体裁をもちながら、しかも仔細に検討すれば、前置きと結語を省略した形で、すでに物語の導入部と展開部、および結論に相当する部分という計算された構成をもっていることがわかる。このうち導入部については、省略の是非をめぐって論じた内容によつて、すでに自明のことであるので、ここではもっぱら、物語の展開と結語の部分について述べようと思う。

最初に注意を喚起したいのは、モリス・バッサンの指摘を待つまでもなく、⁽¹⁾ 若者のこのスラムの実験紀行が水平軌道ではなくて、環状軌道に沿って行なわれている点である。しかもその軌道は、地上楽園を巡回するのではなく、スラムという下層社会 (underworld) への巡礼 (pilgrimage) という皮肉な構想をもっている。若者の紀行が、例えばメルヴィルの『クラレル、聖地における詩と巡礼』 (Clarel: A Poem and Pilgrimage in the Holy Land) におけるクラレルの紀行にたとえようと、聖地はさしずめ、若者がまんじりともせず、一夜を過ごす木賃宿ということになり、この実験紀行が、宗教に対するアイロニーというアレゴリカルな物語としての性格を帯びてくる。あるいは物語の性質からいうと、むしろホーソーンの「若いグッドマン・ブラウン」 ("Young Goodman Brown") のほうが、いっそう似つかわしいといえるかもしれない。紀行は地理的に、バワリー街への起点としては格好の場所である、シティー・ホール・パークに始まり、また同じ公園で終わっている。若者が実験の出発点と決め込んでいた公園に着いたときには、すでに町の子供たちから「ルンペン」とか「浮浪者」とか、様々な悪口を浴びせられた結果、「彼の心は失意のどん底に沈んでいた」とあるが、このことは、すくなくとも外見上、彼はれっきとした浮浪者で通用していることを示している。しかも陰悪だった空からは篠突く雨が降ってきて、上衣の古いビロードの襟元から雨水が容赦なく入ってくるし、衣服は、みるみるずぶ濡れになって、いやが上にも零落の気持をあおり立てる。公園では、不幸を分かち合える無宿者がいるものと期待していたが、折りからの雨に、円形に並んでいるベンチには「いつものお荷物」の姿は見当たらず、「打ち捨てられたベンチ」は街灯の明りをうけて、じめじめと光り、背後の「濡れた芝生」も雨に光っている。ブルックリン橋の方向へ、りっぱな服装の人の群れが歩いていくが、彼らは今の若者には無縁の者でしかない。若者は足を引きずって、パーク・ロウをバワリーの方へと歩を運ぶ。パーク・ロウの北はずれのチャタム・スクエアまでくると、さすがに、酒場や安宿の前に、「嵐の中に、尾羽打ち枯らした鶏よろしく、悲しそうに、目当てのない人々が立ちすくんでいる。ここまで来て、若者はやっと浮浪者の仲間名実ともに身を投じることか

できたのである。クレインは、貧困の実験者の若者に、このような「冷たい、荒れ模様の夜」という悪条件の下で、実験の第一歩を踏ませていることは、はなはだ意義深いといわねばならない。というのは、貧困の辛酸をなめるといふ大前提のためには、最悪の条件こそが、真に実のある実験効果を生み出す要因となるからである。

ここで作者は視点を、冷たい夜霧に包まれたスラム界限の環境に向け、自然主義的な主題を、彼独自の印象主義的な画面に描き上げていく。まず画面の前景には、恐ろしい馬力で動く「赤と真ちゆう色に輝く」車体の、ケーブル・カーが車輛を連ねて、静かに進んでいく。時々、けたたましく、ゴングの音を響かせて静寂を破ることはあるが、その進行が「静かで、抵抗できない、危険に満ちた、陰うつな」印象を若者に与える。ついで、視点はケーブル・カーを離れて、はねかけられた泥で、ぬかるんでいる舗道を行く二筋の人の流れに移るが、作者の関心はむしろ、人々が舗道に残す「傷跡のような足跡」に集中する。頭上では、折りしも、高架軌道を走る列車が、甲高い車輛の音を軋らせて、駅に止まるところで、その駅はと見上げると、脚のような台脚に支えられているその様子は、「さながら通りの上にしゃがみ込んでいる、何か巨大な種類のかに」のように見える。一見これは、ありふれた大都會の夜の光景を写した風景画のように思われるが、それでいて単なるストリート・シーンとして見過ごしてしまうわけにはいかない深い作意が込められている。すなわち、画面では、鋼索鉄道とか高架鉄道といった文明の尺度としての乗り物が、人間の幸福を約束する手段というよりも、むしろ人間を抑圧し、その自由を拘束する物質文明の象徴として用いられていることは、それぞれ上に、引用符号で示した用例のように、作者がそれらに与えている比喩的形象を考えると、疑い得ないところである。それと対比して、虫けらのように「群がって歩き」、歩く度に「傷跡のような足跡」を残している人間は、いわば、彼らを睥睨する巨大なかにの餌食にすぎない。このようなクレインの対照的な描出法は、自然主義的な素材をこなす常套手段というべきものであり、写実のみに徹することなく、むしろ印象主義的なタッチによって写実を修飾し、写実の彼岸に、現象界の根底にある実在^{リアリティ}を表象的に浮かび上げようとするのである。この

点で彼の印象主義は、しばしば表現主義的な展開をみせることがある。このスラムの夜霧にくすんだ夜景など、クレインの代表的な一幅の印象画というべきものであらう。

このような環境に実験生を置いたあとで、クレインはまず、「浮浪者が食うように食う」実験を彼に課している。そこは街角にある「お客を呑み込もうとする様子の」飲食店で、表に「今夜、熱いスープ無料サービス」の看板が立てかけてある。ひもじい者にとって、その魅力的な外観が、ここでも作者の比喩のきいた文飾的な文体によって、いやが上にも誇張される。空腹をかかえた浮浪者の、注目の的であるパタンパタンと開いては閉まる自在戸を、「貪欲な口」に例え、「店が肉付きのよい人々を詰め込む」度に、恐ろしいほどの食欲を傾けて、「さも満足したようにピチャピチャ舌鼓をうつ」というような巧妙な感情移入表現を通して、飲食店の前に吸い寄せられる無宿者の心情が、即物的に印象される。しかもクレインの炯眼は、飲食という卑近なものの表現を通してさえ、そこに自然主義的な課題の可能性を探ろうとしている。例えば、この自在戸の「貪欲な口」(ravenous lips)の「ravenous」には「greedy」という意味のほかに、「predatory」(餌食を捕食する)という意味があり、それがこの店の「お客を飲み込もうとする様子」とか、「肉付きのよい人々を詰め込む」という表現と結びつくとき、それはもう単なる飲食店というより、「今夜、熱いスープ無料サービス」の看板をおとりとして、無辜な無産者を餌食とする、資本主義の貪欲さに対するアイロニカルな比喩という含みを読み取ることができらう。このイメージは、店に呑み込まれる人間を「異教徒の迷信に捧げられるいけにえ」に例える隠喩を伴うことによって、一層明白となっている。

若者も、そのおとり^にに誘われて、いけにえの一人になるわけだが、もちろん彼には「浮浪者が食うように食う」という大目的があるのだから、正確には、いけにえではなく、むしろ実験者としての目的達成のため自ら求めて飛び込んでいったというべきだろう。けれども、彼の精神状態はすでに絶望のどん底にあり、空腹も手伝って、名実ともに、浮浪者のひとりに自己を同化することに成功していたといつてよい。だから、しるしばかりの鶏肉が浮かんでいる薄

いが、湯気の立つ熱いスープを啜りながら、愛想よくスープを出してくれた「油ぎった、しかし堂々とした、ほおひげをたくわえた男」を、「聖さん台の向こうで司式する司祭」とも見たのは、無理からぬことである。この飲食店で夕餉にありつき、浮浪者が食べるように食べる経験をつんだ若者は、表の通りへ出ると、早速目についた「みすばらしいなりの男」に安宿を知らないかと、たずねる。男は、金があるときは、いつも泊まることにしている宿の方を指さし、泊り賃が十セントだという。若者は高すぎると言って、「頭を悲しそうに横に振り」、話にのらない。若者のこの所作は、自分が浮浪者として、相手に通用するかどうかを確かめると同時に、どうせ実験するのなら、もっと安い宿の方が貧困の実験のためには、より適切であると考えた結果であろう。このような物語の展開にも、体験を作家の絶対条件とする若いクレインの意気込みを看取することができよう。

二人が立ち話をしているところへ、ぼうぼうとした頭髪に、ほおひげを生やし、犯罪者のような目つきの男が千鳥足で近づいてくる。その男の様子は、さながら「不手際な犯罪に深くしみついている暗殺者」のように見える。これが、すでに述べた「暗殺者」という有難いあだ名を頂いている男で、男は二人を認めると、急に「愛くるしい子犬のような」おもねる声で、「施しを乞う、小歌のようなせりふ」を口ずさみ始める。彼の言葉は、さきに実例を引いて説明した通りの、下層社会の典型のような形のくずれた、ひどいものである。話の内容は、五セントの持ち合わせがあるが、宿賃には二セント足りないので恵んでくれというものだ。若者が、その五セントを見せてみると、男は衣服をまさぐった揚句、差し出したが、四セントしかない。そこで若者は、この辺りで、どこか木賃宿へ連れていくてくれたら、残りは出してやろうと条件を出し、結局、若者は暗殺者の案内で、「宿なしが眠るように眠る」ために、木賃宿へ足を運ぶことになる。そして、若者が生れて始めて投宿した安宿で過ごした一夜の体験の内容は、すでにクレインの印象主義的文体について述べた箇所と詳細に説明した通りである。

八

若者は、心底を揺さぶるような深刻な体験を積んだ興奮に、結局その夜は一睡もせずに朝を迎える。そして「太陽の輝かしい光の槍」が「亡霊どもを大敗走させる」のを満足げに見届けた上で、やっと眠りに落ち入る。大声でのしる声に、はっと目を覚すと、暗殺者が寝台のへりに座って、「やすりのように軌る指の爪」で、しきりに首筋を搔きながら、ここの南京虫ときたら、足に缶切りをつけてやがるんだと、まくし立てる。若者は、早々に衣服に着替えると、寝台に腰をおろして、周囲の様子をうかがう。夜中には幻影のすみかであった、その同じ部屋が、いかにも「陳腐で、つまらなく」見える。浮浪者の中には、筋骨の逞しい、「さながら酋長のように、どっしり構えた」男たちもいるが、ひと度、見苦しい衣服をまとうと、一変して、欠陥と不体裁の見本のようになる。また両肩を落とし、ねこぜになって、ひょうひょうと歩き、醜さをさらけ出している連中もいる。中でも目立ったのに、髪の毛をぼうぼうと生やした、太っちょの小男がいて、「魚売り女のように口汚く」ののしっている。「なにか身につける品物の一つが無くなった」とこぼしている様子である。⁽⁶⁾

若者は、そそくさと身仕度すると、暗殺者と一緒に宿を出る。表の通りへ出たときの若者の心境を代弁して、作者は次のように書いている。

通りへ出たとき、若者は、ぞっとするような環境から、突然開放されたことによる安堵感はずつにしなかった。そういえば、そんなことはすっかり忘れ去り、彼は、全く不快や苦痛の気持なしに、いとも自然に呼吸していたのだった。⁽⁷⁾

このような若者の心境の変化は、環境から受動的に影響をうけたり、あるいは能動的に、環境に順応しようとする人

間の本性についての、自然主義的な作者の理解を物語るとともに、若者の実験的態度が、それだけ真剣に対象に自己を没入した結果であることを示している。

しかしクレインは、このような物語の展開においてさえ、彼の持ち前のアイロニカルな視点を挿入することを忘れない。それは、相棒の暗殺者が「あの宿屋で、寝間着をきてたやつがいたぜ、嘘じゃねえぞ」と言う、自信ありげな言葉に暗示される。それを聞いて、若者は「一瞬当惑する」が、やがて笑いながら「嘘をつけ」と言うだけである。だれが着ていたのか文中では明示されていないが、前後の脈絡から、それが若者自身であることは明らかである。つまり、若者は、寝るときには寝間着をきる習慣を、木賃宿にまで持ち込む失態を演じることによって、彼の貧困の実験についての認識の不足を露呈し、馬脚を露わしたことになるのである。しかも作者は、それが若者本人であることは知らぬとはいえ、暗殺者に、この事実を繰り返し述べさせることによって、アイロニカルな効果をいきおい高めることに成功している。

舗道に行く腹をすかした若者に、「当店自慢のハヤシ料理」という看板のかかった、手頃な値段の地下食堂が目につく。その店で腹ごしらえすると言い出した若者に、暗殺者は、うらめしそうに食堂の入口に目をこらす、そのまま通り過ぎようとする。若者は不憫に思い、彼を呼び止めて、次のように言う。

なあ、いいかい、もしおまえが朝飯を食いたてんなら、三セントの食代を貸してやってもいいぜ。だが、いいかい。おまえは、口を見つけてひと稼ぎしなきゃなるまいよ。おれは、おまえを助けてやるつもりはねえもんな、でなきゃあ、日も暮れねえうちに、破産しちまうのがおちさ。おれは、百万長者じゃねえんだぜ。(50)

すでに引用したキャサリン・ハリス宛の手紙の中で、クレインが書いている「バワリーの生活の根底にあるのは、一種の卑屈根性である」との判断は、若者のこの言葉や、地下食堂の中で、暗殺者が打ち明ける身の上話が根拠になっていることは明白である。つまり、クレインにとって、鼻持ちならなかったのは、高度成長がもたらした社会のひず

みもさることながら、それにも増して、困窮者のひとりひとりがいだいている寄生虫的根性であり、そこにスラムに内在する禍根を求めようとする認識を、彼はすくなくとも、貧困の実験の収穫として得ることができたのである。こうして、暗殺者の「りっぱな紳士」というお世辞を背に受けて、若者は彼と食堂に降りていく。そこで二人は、二セントのコーヒーと一セントのロールパンの食事を取る。コーヒーのコップには、一面に、茶色のひびの筋が走り、錫製のスプーンといえは、「最初のピラミッドから出土したような」代物である。おまけに表面には、「年数を経た、黒い、けげに似た湯あかがこびりつき、いつとも分からねほど昔に齒の攻撃をうけて」曲がり、齒傷がついている。けれども暖かいものが腹に入ると、暗殺者も若者も元氣を取りもどし、和やかな気分になってくる。暗殺者は昔の記憶がよみがえってくるのか、身の上話を始める。ニュー・ジャージー州のオレンジで、いい職にありついたが、三日目に、親方に一ドル貸してくれと言うと、怒鳴られ、職を失ったとか、南部は食べ物はおいしく、生活は楽だが、黒人が一日、二十五セントか三十セントで働きやがるんで、白人は追い払われてしまうという話。大きくなったのは、ニューヨーク州北部で、ビールもウイスキーもない森の奥地だったが、いつもおいしいものが食べられた。いつまでもぶらぶらしてたもんで、おやじが出て行けとぬかしやがった。ひでえ親もあったもんだと言って、そのまま家出してやったといった話。若者は、そういう暗殺者の愚にもつかない打ち明け話に耳を傾けながら、バワリー氣質（か）ともいべき通弊がスラムの人々の中にあつて、それが災いして、彼らを窮状から立ち直ることを不可能にしている事実に思い当たる。仕事にありついても長続きせず、転々と職を変えるうちに、すっかり怠け癖がつき、やがて寄生虫的生活に甘んじるようになる。つまり、バワリーの根底にある卑屈根性が、スラムの典型的人物ともいえる暗殺者の中に、そのまま具現されている事実を、若者は発見するのである。

こうして、ともかく若者はこのうす汚いスラムの地下食堂で朝食をとり、これで「浮浪者のように食う」経験を二度つむのである。食堂を出たあと、ある店から一人の男が、食料の盗みを働いて逃げようとするところを、「恐ろし

い、龍のような」いかめしい男に捕まる事件に出くわすが、いわばこれは、スラムにいつも見られる光景で、朝食を恵んでやった暗殺者もいつか近い将来に、同じ轍をふむ運命を暗示するものである。若者は暗殺者に「用心しろ、さもないと今夜あたり、ひどい目にあうぞ」と警告するが、当人は朝食にありついて、後味を楽しむように舌鼓を打ちながら、「まるで王様のような暮らしたなあ」と言うだけで、「将来に目を向けることを拒む」のである。そして暗殺者は満面に笑みをうかべ、おどけて、すずめ踊りをしながら去っていく。

このようにして、スラムの典型的な人物である暗殺者の先達を通して、若者は、スラムの人間の生き様を自分の目で見て、肌で感じ取ることができ、一応の成果をあげて、下層社会（underworld）の巡礼を終える。彼の巡礼の目標であった「浮浪者が食うように食い、放浪者が寝るように寝る」初志は、ひとまず、つらぬかれたのである。しかし若者自身は、依然として、よそ者であり、スラムの人間にはなりきれず、単なる傍観者でしかあり得ない。そのことは、例の白い寝間着をきて寝たいきさつや、暗殺者と別れしなに言う彼の警告の中に明瞭に暗示される。けれども、実験者の使命は、実験の対象になりきることではなく、その観察者であり、批判者としての立場を厳正に守ることによって、始めて達成せられる。若者の「貧困の実験」の対象が、パワリーの下層社会、すなわち‘underworld’であり、この語には、またよみの国（Hades）の意味があることを考え合わせると、暗殺者は、さしずめよみの国の川ステイクス（Styx）の渡し守のケアロン（Charon）の役目を果たしているという憶測も成り立つ。この意味において、若者の巡礼の旅が円形軌道に沿い、再び出発点のシティー・ホール・パークに戻ってくることは、まことに意義深い。つまり、彼は、これまでのプチ・ブル的人生体験からは及びもつかない、恐ろしい、しかし、きわめて貴重な地下社会での体験をつみ、その実験結果をたずさえて、再び地上へ舞い戻ってきたのだから。

シティー・ホール・パークの、例の「彼ら浮浪者階級の伝統によって聖別されたベンチの円陣のところ」へ来てみると、先客がおり、二人のぼろ服を着た浮浪者が、時の経過も知らぬげに、のんびりと腰をおろしている。巡礼に出

かけるときには、冷たい雨にぬれて、「いつものお荷物」が見当たらなかった、その同じベンチに、今日は晴天のせいもあって、二人の連れがおり、若者は、いとも自然にその仲間入りをし、ベンチに腰をおろし、実験の結果を改めて心にかみしめる。彼は大都市ニューヨークのただ中であって、「時の流れが何の意味も持たない」浮浪者たちと、「ベンチに腰かけている浮浪者たちには一瞥もくれずに、せわしげに通るすぎる、りっぱな服装の人々」の間に立つ、仲介者としての自分を考え、反省し、人間や社会や文明について思いを凝らさないではいられない。若者は、「重大な使命を帯びて」行き交う巷の人々と、彼らが重要視する価値の基準としての「社会的地位、安楽、生活の楽しみ」から、あまりにもかけ離れた今の自分を比較し、思わず畏怖の念がこみ上げてくるのを感じる。彼のこのような感懐は、巡礼の旅を終えた彼の精神が、そのような世人の価値の指標にとらわれていた過去の狭量な自己を葬って、同情と共感を基調にしたより広量な自己へと開眼した事情を物語るものであろう。しかし、彼がスラムの環境と、そこで生活苦にあえぐ貧困者に寄せる共感は、単なる感情中心の、一時的な感傷ではなく、底に厳しい批判精神と、向上への説得の熱意を宿すものであることは、物語の内容や結末の一節からみて、明白である。若者は、公園の背景をなす「無情な色合いの、恐ろしいばかり高い」高層ビルに目をやる。そして、せわしげに舗道を行く無数の人々と、林立する高層ビルの対比から、若者は、今回の貴重な人生体験の成果を、次のような比喩的構図の中に集約する。

（林立する高層ビルは）その大望の崇高なるあまり、足下でもがいている哀れな人々を無視し、下界に一瞥を与えることもなく、帝王の如き頭を雲中に突き上げている国家を象徴するもののように、彼には思われた。（41）

ちなみに、ニューヨーク州の俗称の 'Excelsior State' の excelsior は「更に高く」、「向上の一途」の意味をもつラテン語からきていることを考慮に入れると、クレインはこの標語を意識しながら、アメリカの物質文明批判の皮肉な構図として、引用文のような表現を用いていることは明らかである。さらに若者には、大都市の騒音が、旧約聖書、

創世記第十一章のバベルの塔の話に出てくる「言葉の混乱」(the confusion of tongues)をもつて、不注意にべらべらまくし立てる「耳慣れない言葉の混乱」(the confusion of strange tongues)のように思われ、あるいは自分には無縁な「貨幣の触れ合う音、この都市の希望の声」としか思われない。このような皮肉な連想ないし比喩は、しかし、アメリカの物質文明の賛歌に対する耳障りな不協和音を響かせるに止り、批判ないし反抗の高まりをみせないことも、クレインの自然主義の特色の一つである。

論を終えるに先立ち、最後に触れておかねばならないことがある。それは、他の作品と同様、この作品の結末でも、最後の三行に付け加えている作者特有のアイロニカルな視点である。上述の如く、アメリカの物質文明批判とも受け取れる社会主義的自覚を、貧困の実験の結論として、若者に与えておきながら、作者は、皮肉にもその当人を、卑屈な、スラムの浮浪者の意識へと追いやっていく。若者は、いつしか、公園のベンチに腰をおろしている自分が、浮浪者であるように思いはじめ、引きおろした帽子のへりからのぞいている目付きまでが、「何か罪の自覚に伴う犯罪者のような表情を帯びて」いることを自覚しないではいられない。朱に交われれば赤くなると、作者は言い度いのだろうか。いや、そうではあるまい。クレインの真意は、朱に染まるほどに、対象に自己を没入しなければ、どんな実験にも価値ある結果は期待できず、真にすぐれた芸術作品は生れてこないということであるに相違ない。

以上、縷々述べてきたような物語の展開と結末から言っても自明のごとく、この作品は、その比喩に潤色された多彩な印象主義的文体、対象に取り組む作者の自然主義的な、ゆるぎない視点、および内容を盛るに相応しい絵画的な構成など、いろんな点で、クレインの特色を遺憾なく発揮した秀作であり、物語の性格から推して、まさにクレインの自然主義作家としての自覚と立場を、明確に打ち出した宣言の書としての価値を立証するものだと言えることができる。この意味において、省略した結尾の部分にある、実験の結果、貧困の傍観者の理解にこうむった「かなりの変化」は、スラムの貧民によせる深い同情と、彼ら自身に内在する卑屈根性に対する批判と、社会の底辺に住

む、文化の進展から取り残された不幸な犠牲者には一瞥もくれない、アメリカの産業主義に對する社会主義的な開眼と、さらには、人間の内的世界に對し、そういう社会的環境が及ぼす不可抗的な影響力についての、新たな認識などを内包するものだと言ふことができるだろう。

「それで」と、友人は言った。「お前は浮浪者の物の見方つてのが分かったのかい？」
「分かったかどうかは知らんが」と、若者は答えた。「ともかく、多くの物の見方に、かなりの変化をこらめたように思うんだ」(42)

注(1) Stephen Crane-A Collection of Critical Essays, ed. Maurice Bassan, Prentice-Hall, 1967, "The Design of Stephen

Crane's Bowerly "Experiment", by Maurice Bassan, p. 119.

(2) 本論の「その一」でもすでに指摘したように、この小男は、テネシー・ウィリアムズの短編集『片腕その他』(One Arm and Other Stories, 1948)の一篇「ブルコウの天使」("The Angel in the Alcove")に登場する挿絵画家で肺病病みの若者で、彼が紛失した櫛という物語の設定に酷似する。後代の作家に与えたクレインの影響を示す一例である。

(3) Robert Wooster Stallman, Stephen Crane: An Omnibus, New York, Alfred A. Knopf, 1970, p. 39. 以下引用文のあとに()に入れて示した数字は、すべて本書のページ・ナンバである。

※ (この小論は「英米文学」(第二十九巻、第一号、英文学科創設50周年記念論文集、関西学院大学英米文学会、昭和五十九年十二月発行)所載の拙論「貧困の実験」とクレイン」(「その一」)に続く「その二」として書かれたものである。)